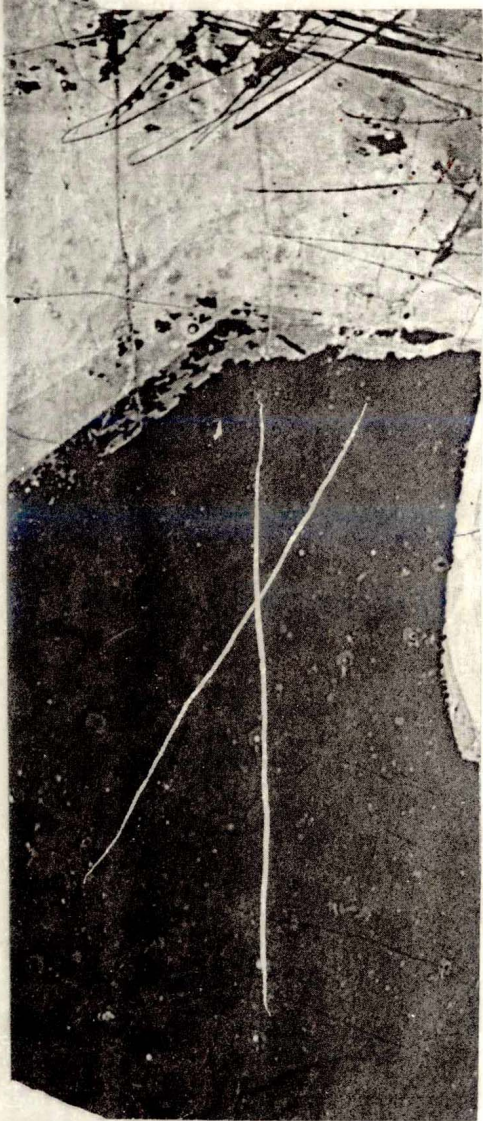


怒りの子

高橋たか子



怒りの子

高橋たか子

講談社

怒りの子^{いか}

一九八五年九月二〇日 第一刷発行

著者——高橋たか子^{たかはし}

© Takahashi Takako 1985, Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三一九六一二二（大代表）

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一四〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

ISBN4-06-202414-4 (0) (文1)

怒りの子
目次

第一章 5

第二章 123

第三章 249

裝幀·司修

怒りの子

第一章

「お姉さん、こんなこと言うてもええやろか」

美央子はさっきからながなが喋っていて、結局のところ、これを言うために電話したのだ
が、言いだしにくくて別なことを喋ってしまい、やっと、ためらいながら切りだした。

「何でも言うて。何言うてもかまへんよ」

初子は笑っているような声で、言った。

「ゆうべ、うち、けったいな夢みたんや」

美央子は思いきって言った。

「あほらし、夢の話？ そんなもん要らんわ」

初子は笑っているような声を茫洋とぼかしてしまつて、言った。

「何でも言うて、何言うてもかまへんよ、て言うたやないの」

美央子は、いつでも何でも言える人というものを直観していたからこそ、遠縁の親戚にす
ぎない初子を、自分勝手にお姉さんと呼んでいたのだったが、たちまち撥ね返されて、むっ
として言った。

「要らん」

初子は短かく同じことを言う。とは言っても、拒む声でなく、人を煙に巻くような声である。

「要らんで、何にもお姉さんのために言うのん違うえ、うちのためえ、うちが聴いてほしいね、要るのはうちえ」

美央子はくいさがった。

「そやけど、きりないし」

「何がきりないの？」

電話で長話しすぎたことかと思ってみるが、そうでもないような含みがあるので、美央子は言い返す。

「あんたがみた言う夢のこと」

初子はきっぱり言った。

「どんな夢かまだ何も言うてへんよ、それが何できりないてわかるの」

「そんなもんやないの、ほほ」

初子は軽く笑った。

「何がそんなもん？」

美央子は、相手が底なしだと日頃感じていることがいつそう感じられ、なおもくいさが

「そうむきにならんと。一日たったら夢のことはけろりと忘れてしまふし。人に言うもんじゃないわ。言うたら残る、人にも自分にも。残って、ほんまのことになつてくる」

「へえ、そお、そんなら黙つてゐるわ」

何となく納得されるものがあつて、美央子はそれ以上固執しないことにした。

何で、お姉さん夢のことよう知つたはるんやろ、と、口のなかで言つた。

「お姉さんありがと。ほな、また遊びにいくわ」

「いつでも来て」

と言ひ合つて、電話を切つた。

けれども、すっぱり頭に生あたたかい蒸気の帽子をかぶっているような気分である。別に珍らしいことではなかつた。なにか強い夢をみた翌日はまるまる一日こんなふうな状態が続く。たしかに初子の言つたとおり、一日たつたら、どんな夢の残りも消えてしまふというのも、また不思議である。

けつたいなこと、と、そうしたすべてにたいして美央子は呟いた。腹立たしさをこめてである。そのけつたいなことそのものが腹立たしいといった気分なのだ。

ようわからん、と、また美央子は呟いた。ぼうつとした雲にまといつかれてゐるようで、初子に話したらすつきりするかと思つたのだが、あんなふうには肩すかしを喰らわされてしまつた。

とはいつても、けつたいだし、よくわからぬ、といったものは、昨夜の夢のことではかな

らずしもない氣もしてくる。ぼうつと頭にまといっている雲は、じつは自分の中にもっと濃くあつて、そのところに目をやると、たとえば、いつか山へケールで登った時に天氣がわるくて山腹より上ではすっぱり雲のなかに入ってしまった、もうもうと蒸氣がとぐろを巻いていたのを、いま思い出すが、あんなふうなものが自分の中に広く深くあるのが感じられるのだ。いつもいつもそれを感じているが、今日はいつそうそうなのだ。

夢みたからやろ、と、美央子は言ってみた。そうなのかどうかわからなかった。誰かこのことで教えてほしかった。けれども、まわりを見まわしてみても、何かを答えてくれそうな人はいなかった、初子をのぞいて。

美央子は立ち上って、窓ぎわに立った。隣りの家で半分さえぎられているが、墓地が見えている。みぞれが降っていた。そうでなければ外を歩いてみようと思ったのだ。こういう眺めのアパートを借りるについて、知っている人たちは縁起がよくないからとうるさく言ったが、美央子は気にしなかった。初子だけはすすめてくれて、田舎から出てきて十ヵ月初子のところに置いていた仮住居を、やっと一人の住居へと切り換える一切の雑事さえ、てきぱき助けてくれた。

うち、お墓氣にせえへん。

と、美央子は言った。

何であの人ら、あんな言わはるんやろね。お墓のあるとこひろびろしてるのに。場所もそやけど、もっと別の。何て言うたらええのやろ、見えへんこまでずうつと見えてるもんが

続いてる。

と、初子は言った。

美央子はぼんやりその会話を思い、窓ぎわに立っている。みぞれの、雨のすじに混じる白い点のところに、じいっと視覚をあてている。その半透明な幕のために今日は墓地がかすんでしまっている。

見えへんとこまでずうっと見えてるもんが続いてる、て何なんのことやろ。と、美央子は思い出している。

まあええわ、そんなことより火急のことがうちにはあるわ、と、自分に言う。

けれどももいたい何が火急のことか自分でもわからなかった。にもかかわらず、この生きている自分がいますぐ生きねばならぬ何かがあるという気がして、それを明日にでも、いや、今日にでも探さなければならぬ。

そうや、あの学校辞めよ、と、美央子はふいに思いたった。

去年の四月に田舎から出てきたのは料理学校へ通って栄養士の資格をとるためであったし、初子のところの仮住居からこのアパートへと、正月十五日に引越したのも、歩いて通える近さのところで自分と学校との間に親密な距離をもちたかったからであったのだが、ふいに辞めようという気になった。

はつきり決心したわけではないが、そうしたいと思った。

何なんでやろ、と、美央子は自問した。

よくわからなかった。けれども辞めようと思った途端に、これまでそこへ寄せていた熱心さが、ずっと干からびてしまうのが感じられた。

依然として昨夜の夢がまといついている。細部まで妙にはつきりしていて、全体を包みこんでいた恐怖がまだ胸のところにある。いくらか薄れはしたが、その分だけ拡散して、自分の中のいいようもない広がりがある。そのことの脈搏で息づいている。美央子は電車の線路を歩いてきたのだ。田舎でよく知っている汽車の単線の線路に似ていた。両側はびっしり木が茂っていて、山の木のようにでもあり住宅の大きな庭の木のようにでもあり、ずっと先に次の駅が見えていた。夕暮か明方か、薄明がたちこめている。美央子はその駅のところまで早くたどりつきたいと歩を早めていた。なぜなら、単線なので、電車が来たら身をよけるところもなから。木が線路ぎりぎりまで茂っていて、いわば天井のないトンネル状をなしていたから。両側に壁のように立つ茂みと茂みの間を、電車が来たら、美央子は下敷きになるほかないのが、はつきりしているのだ。そのあたりから何となく怖れが萌しはじめていたが、それは日頃ごく日常のことで感じる程度のものにすぎなかった。ところが、電車でなくトラックが前方からゆるゆる進んできた。そのことを意外に思い、そして何輛もの電車より一台のトラックならまだ人間味があり、運転手にむかって手を振れば停車してくれるだろうという安心感があった。けれども、その気分とはうらはらに、理由のない恐怖が（なぜなら、手を振れば停車してくれるのだから）つのつてくる。そして、手を振ることさえできず、壁のように立つ茂みの、とある凹みが、たまたま目についたので、そこへ身を入れた。この場所があ

ったことは何と僥倖だったか。そこに潜んでさえいれば、トラックが擦過していき、そしてこの一件は済むだろう。にもかかわらず恐怖だけがつのっていく。停車をあれほど願っていた自分が、今度は擦過をこんなに望んでいて、というのも、じつは、停車するのではないかという別な怖れが萌しはじめているからなのだった。何が起るのかうっすらわかりかけ、この夕暮なのか明方なのかはつきりせぬ薄明るく薄暗い、線路だけ伸びている人気ない眺めの全体が、しんと静まりかえって、そのことの予感を放射しはじめた。何が起るのか、口には出せないけれども、もう明白だ。自分にとって明白というより、いいようもない自分とは別な者が、それを知っている。そんな気分なのだ。案の定、トラックは、擦過していかずにゆっくり速度を落として停車の態勢をとり、そして、美央子のいる凹みを車体でふさいでしまふように停車した。何が起るのかを、その事実よりむしろ、つのりにつのった恐怖が告げている。この凹みで、殺されるのだ。起ることの一つ一つを、起るまでに知っていて、そのとおりに起っていくことの不思議さは、やはり自分とは別な者が知っているからにちがいない。こんな質の恐怖をいままで感じたことはない。と、夢のなかで美央子は考える。自分の奥のどこか、油の七色に発光するようなところで、その別な者が恐怖している、といった感覚なのだ。それがまた、ぞっとさせる。そうなると知っていたとおり、運転手の大男がトラックから線路へ跳び降りる。そして車体のむこうからこちらへ回わってくる。と、その時、もう死んでしまっている美央子は（もしかしたら自分でなく、さっきから自分の中にいる別な者、きつと、殺された女の人、なぜなら自分は夢をみているのだから、と、夢のなかで考

えていた）その凹みに体を残して、蝶のように飛び立った。大男の手が、蝶を掴みそうになったところで、目が醒めた。

みぞれが降っている。雨に混じっている白い点々が、先程より増えてきている。雪になるのだったらいい。みぞれは内までびしょ濡れにしてしまう。

熱いお茶でも飲まんとたまらんわ、と、美央子は呟いた。

茶をいれるのも待ちきれず、台所からボットをもってきて、湯を飲んだ。畳にべったり坐わって、両手に湯呑みの熱さをじっと抱いていた。

一日たったら夢のことはけろりと忘れてしまうし。人に言うもんやないわ。言うたら残る、人にも自分にも。残って、ほんまのことになってくる。

初子はそう言った。

言わんでも、思い出しただけで残ってしまうわ。こんなことにかかわり合うのたまらんわ。うちの知らんことやのに。

美央子は呟いていた。

シャワーに似た音がし、目をあげると、みぞれが雪しぐれになっている。強いタッチの白い線が、全部雪で、天から無数の小滝が落ちているようだ。

美央子は立ち上りまた窓ぎわに立つ。墓地も何もまったく見えなくて、隣りの家の日本瓦がたったわずかの間にまっしろになっている。

是非とも雪のなかを歩きたく、暖房を消すと、いそいで外へ出た。